



## のこ 名を遺す人

年度末から新年度にかけての端境期<sup>はざかいき</sup>、頭の転換と原稿書きを兼ねて、2、3日伊豆に出かけて来ました。子供の頃に父に連れてきてもらって以来、若かった父を感じる事の出来る、たまに訪ねる懐かしい場所なのですが、その宿の地下の展示コーナーには、いつの頃からか、往年のハリウッドの大女優のマリリン・モンローと、これも56試合連続安打、史上最高のベースボール・プレイヤーといわれたニューヨーク・ヤンキースのジョー・ディマジオのスナップ写真が飾られています。

時は、1954年2月、ディマジオがモンローを伴い、新婚旅行を兼ねて、終戦間もない日本の野球ファンに本場の大リーグの野球を紹介するための来日でしたが、その間のほんの2、3日の休養として、この地を訪れたということです。

マリリン・モンローというと、生前の評価は毀誉褒貶混在し、世間の好奇の目に晒され続けた女優でした。ケネディー兄弟との交際や不審死とも相俟って、揣摩臆測<sup>しまおくそく</sup>を交えて語られることも少なからずあったわけです。もっとも、女優ですから、彼女自身が商品としてのマリリン・モンローを演じ続けたというところもあるのでしょう。私などには全く見知らぬ世界ですが、想像するにショー・ビジネスというきらびやかな世界に身を置くためには、商品としての自分を演じることが自分の身を守る事の出来る方便だったのかも知れませんが、その方便こそがまた、彼女にとって悲劇的な諸刃<sup>もろは</sup>の剣となったのかも知れません。

そのモンローが朝鮮戦争を慰問した時のニュースフィルムが残っています。実は、夫妻が来日してから、当時朝鮮問題を抱えていたアメリカ軍が彼の地にいる自国の兵士たちの慰問にと、彼女にしきりに朝鮮半島での公演を依頼し続け、それに抗しきれず、夫のディマジオの強い反対にも拘わらず単身半島に渡り、この時の渡航が結局は夫妻の離婚の原因になったとも、巷間<sup>こうかん</sup>いわれているわけです。

朝鮮半島の2月が如何に極寒の季節かは、想像に難くありません。両手の手袋をこすりながら、帽子、耳当て、厚手の防寒具で身を包んだ若い兵士たちの熱狂した叫び声に応えて登場する彼女の服装は、肩を露わにしたキャミソールドレス、凍てつくような寒さを全身に浴びながら終始笑顔を絶やさず、白い息を吐きながら熱唱する姿は、今思うと、誠に敬服する他ありません。プロ魂といえ、それまでですが、当時モンローは、未だ27才頃のことだったのではないかと思います。

とある冬の日の韓国の中央日報日本語版が、この時の様子を特集記事にしていました。「休戦からわずか6カ月しか経っていない不安定な時期だった。前線では銃声が響き、智異山(チリサン)など後方でも共産軍が蠢動<sup>しゅんどう</sup>する準戦時状態だった。3年間の戦争で社会基

盤施設は完全に破壊され、宿泊施設も良くなかった。しかし彼女はためらわず訪問した。誰よりもこうした事情をよく知っていた米軍は汝矣島（ヨイド）空港から手厚く歓迎した。これに報いるために彼女は4日間、全国の基地を回って10回も公演した。冷たい風が吹く真冬の厳しい野外だったが、軽装で誠心誠意を尽くして歌って踊った。急ごしらえの仮設舞台に更衣室も布で覆われていたが、彼女は不平を一切言わなかった。公演だけでなく配食、負傷兵慰問などにも積極的だった。彼女が望んで訪問するところが多いため、在韓米軍は専用のヘリコプターを提供したほどだ。後に『公演中に雪が降ったが、とても温かく感じた』と回想した」と。

どんな仕事をするにしても、一流にまで昇り詰める人には人並以上の苦勞と努力があるものです。彼女を好奇心目で見た多くの人々の一人ひとりの痕跡は、歴史のどこにも残ってはいません。それに対して、この27才の女の子の名前は、忘却の彼方に置き去りにされていく帰らざる名ではなく、20世紀の記憶として永遠に留められることに違いありません。

彼女の実像は、鈴なりになってシャッターを押すカメラマンの前で足を組み、満面に笑みを浮かべる、あの有名な帝国ホテルロビーでの写真や映画から受ける印象とはほど遠く、滞在したホテル近くの伊豆の小さな漁村を訪れた時の印象を村の人が語るには、親しげに小さな日本の老婦人の肩を抱き、老人や子供に分け隔てなく接した、静かで上品なアメリカ女性であったということです。

[>前のページへ戻る](#)